

中村 渉 (東北大学)
wataru.nakamura.a8@tohoku.ac.jp

1. はじめに

補助形容詞「ほしい」を伴う日本語の願望構文の統語的特性、特にテ形接続の補部節の意味上の主語の格交替は、主として生成文法及び語彙機能文法の視点から研究されてきた(例：柴谷 1978; Matsumoto 1996: Ch.3; 竹沢 1998: 81-87)。¹

- (1) a. 太郎が 花子に ワインを 飲んで欲しかった。
b. 太郎が 花子が ワインを 飲んで欲しかった。
- (2) a. *太郎が 雨に 降って欲しかった。
b. 太郎が 雨が 降って欲しかった。
- (3) a. 太郎が 花子に 死んで欲しかった。
b. 太郎が 花子が 死んで欲しかった。

例文(2a,b)と(3a,b)のコントラストが示すように、「ほしい」の補部の意味上の主語項が有生名詞であれば、主格標示と与格標示のどちらも可能であるが、(2a)のように、無情物を指示する場合には、補部の意味上の主語の与格標示は不可能である(柴谷 1978: 116-118)。

本稿の目的は、**Role and Reference Grammar [RRG]** (Van Valin and LaPolla 1997; Van Valin 2005)における接続構造(複文構造)の類型論に基づき、(1a,b), (3a,b)のような願望構文における「ほしい」の補部の意味上の主語の格交替(与格⇔主格)を説明することである。

以下の第2節では、本稿の枠組である RRG の統語構造を要約する。具体的には、単文の統語構造を踏まえて接続構造の類型論を導入する。第3節は(1a,b)の接続構造を同定する。第4節は、(1a,b)のリンキングを説明し、格付与制約を導入した後で、(1a,b)の格交替は願望構文の接続構造の相違に帰着することを示す。第5節は結論である。

2. 理論的枠組

RRG は、単層的な統語表示を持つ**平行構造文法**(Jackendoff 1997)の一タイプとして、意味構造(動詞の意味の語義分解及び一般的意味役割としてのマクロロール)、フォーカス構造(フォーカスのタイプ/生じうる領域を定める情報構造)(Lambrecht 1994)に加えて、統語構造を表示レベル(「投射 (**projection**)」と呼ばれる)として想定する。

文の統語構造は、主として語彙範疇が担う文の「構成素投射 (**constituent projection**)」と機能範疇(例：助動詞)を表示する「操作子投射 (**operator projection**)」に分かれる。操作子はこの直後に説明する文の構成素構造を前提としている。また、動詞の意味論から文法関係へのリンキングは、①動詞の意味の語義分解⇒一般的意味役割としてのマクロロール、②マクロロール⇒統語的軸語 (**syntactic pivot**)、の2段階に分かれる。

RRG は、「述語、命題、事態」という意味的区別に対応する普遍的な統語的単位として、「内核 (**nucleus**)、中核 (**core**)、節 (**clause**)」を想定する。左記の3者は(節が中核を含み、中核が内核を含む)「節の層状構造 (**layered structure of the clause**)」を構成する。この3層構造が構成素投射に相当し、操作子は構成素投射の各層を修飾する。

¹ 接尾語「たい」を伴う願望構文の非主語項の格交替の分析の素描は中村(2015: 103-104)を参照。

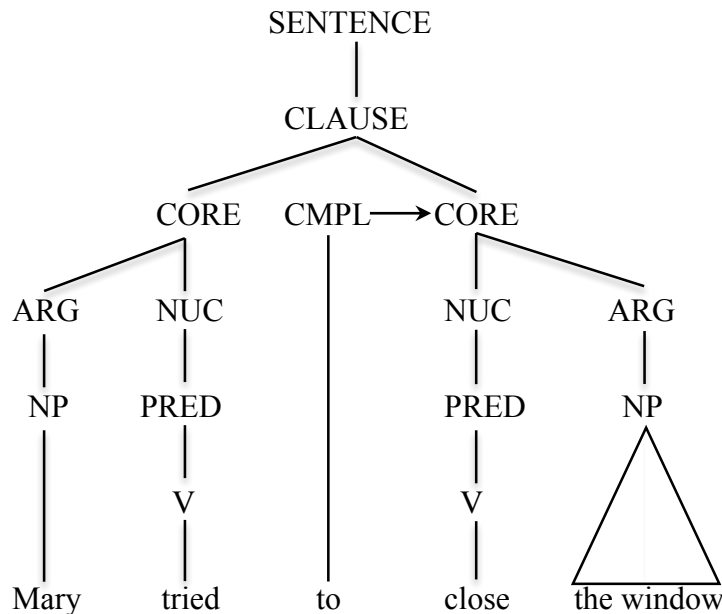
- (4) 節の層状構造とその意味的基盤
- 内核 (nucleus) : 述定機能を担う述語
 - 中核 (core) : 述語+その意味的項
 - 節 (clause) : 中核+周辺部 (periphery)
- (5) 修飾する層による操作子の分類
- 内核操作子 : アスペクト辞...
 - 中核操作子 : 否定辞, 根源モダリティ辞...
 - 節操作子 : 時制辞, 認識モダリティ辞, 証拠性, 発話内力...

(4c)の「周辺部 (periphery)」は中核レベルの付加詞が生じる領域である。操作子は修飾する層に応じて、(5)が示しているように、内核操作子、中核操作子、節操作子に分かれる。操作子の線状的順序は普遍的原則 (Bybee 1985) に従う。² 具体的には、動詞の左側又は右側に3クラスの操作子が全て生じる場合には、動詞に最も近い位置に内核操作子、最も遠い位置に節操作子が起きることになる。操作子と層状構造に属する構成素の語順は普遍的／言語特定の制約群の相互作用により決定される。

上述の節の層状構造及び操作子投射に基づいて、接続構造は定義される。具体的には、接続構造は①結合する層のタイプ (接続 : 内核／中核／節) 及び②層の結合様式 (接合 : 等位／連位／従位) を組み合わせることで9通りに分類される。³ (6a)-(6c)は次節で導入する中核レベルの接続構文の例であり、図1は(6b)の中核連位接続の構成素構造である。

- (6) 中核接続構文の3つの下位タイプ
- 中核等位接続 (core coordination) : Mary told John to close the window.
[CLAUSE [CORE Mary [NUC told] John] [CORE to [NUC close] the window]]
 - 中核連位接続 (core cosubordination) : Mary tried to open the door.
[CLAUSE [CORE Mary [NUC tried]]] [CORE to [NUC close] the window]]
 - 中核従位接続 (core subordination) : Mary regretted slapping John yesterday.
[CLAUSE [CORE Mary [NUC regretted]]] [CORE [NUC slapping] John [PERIPHERY yesterday]]]

図1 : (6b)の構成素構造 (助動詞類を表示する操作子投射及び名詞句の内部構造は省略)



² 名詞を修飾する操作子も3つの下位クラスに分けられる (Van Valin and LaPolla 1997: 53-67)。

³ 連位接続と等位接続の相違点については次頁で説明する。

(6a,b)と(6c)の最大の相違点は、(6c)が中核全体を上位の（主動詞を含む）中核内に中核項として埋め込んでいるのに対して、(6a,b)では、2つの中核が（図1が示すように）構造上は等置されており、中核項を1つ共有していることである。

等置構造を伴う非従属的な接続構文の中で、操作子共有（operator sharing）を伴う構文は連位接続に、操作子共有を伴わない構文は等位接続になる。具体的には、(6a,b)の相違は、2つの中核が中核操作子を共有できるか否かに帰着する。(7a,b)は(6a,b)の例文を過去時制から現在時制に変更し、根源モダリティを表す義務の助動詞 *must* を挿入したものである。(7a)では、*must* の作用域は下位の（補部として機能する）中核にまで及ばないが、(7b)では、*must* の作用域は上位の中核及び下位の中核の双方に及ぶ。

- (7) a. Mary must tell John to close the window.
b. Mary must try to open the door.

従って、(6a)は中核等位接続、(6b)は中核連位接続を実現していると分析される。

次節では、(6a)-(6c)の統語的区別を踏まえて、日本語の願望構文の(1a,b)を分析し、その接続構造を同定する。

3. 願望構文の接続構造

本節は(1a,b)の接続・接合タイプを同定する。まず、(1a,b)の補部に、節操作子の時制辞は生じることができないが、(8a,b)が示すように、中核操作子の否定辞は生じることが可能である。このことから、(1a,b)の補部は中核に相当することが分かる。

- (8) a. 太郎が 花子に ワインを 飲まないで欲しかった。
b. 太郎が 花子が ワインを 飲まないで欲しかった。

次に、(9a,b)は、(1a,b)が例証する願望構文の補部の等置構造を含んだ例文である。

- (9) a. 太郎が 花子に チーズを食べて ワインを 飲んで欲しかった。
b. *太郎が 花子が チーズを食べて ワインを 飲んで欲しかった。

補部の意味上の主語が主格標示を受ける(9b)の容認性は低い。(9b)の低い容認性は、(9b)で、「チーズを食べる」と「ワインを飲む」が等置構造を構成しないこと、従って、「花子」と「チーズ」を切り離すことができない（両者が同じ中核に属している）ことを示している。逆に、(9a)は「チーズを食べる」と「ワインを飲む」が完結した単位として等置されており、「花子」と「チーズ／ワイン」が同じ中核には属していないことを示している。⁴

(8a,b)と(9a,b)の容認性の相違から、(10a,b)を(1a,b)の（操作子投射を省略して簡略化した）統語表示として提出することができる（cf. 柴谷 1978: 116-117）。

- (10) (1a,b)の統語構造（簡略版）
a. [CLAUSE [CORE 太郎が 花子に] [CORE ワインを [NUC 飲んで]] [NUC 欲しい]]
b. [CLAUSE [CORE 太郎が] [CORE 花子が ワインを [NUC 飲んで]] [NUC 欲しい]]

⁴ Sells (1990)は(9a,b)のような対比を動詞句と関連づけるが、動詞句はRRGの構成素構造には含まれず、情報構造を表示するフォーカス構造における「述語フォーカス（predicate focus）」の反映と見なす。その根拠はLambrecht (2000), Van Valin (2005: 80-88)を参照（cf. Carnie 2008: 222-225）。

上記の議論から、(1b)は補部動詞の2つの項を含む中核が上位の中核に埋め込まれた中核従位接続、(1a)は中核等位接続、中核連位接続のいずれかであることが分かる。

最後に、(11)は(1a)に「ほしい」を修飾する中核操作子として機能する否定辞を付加したものであるが、否定辞の作用域は「ほしい」の補部である下位の中核には及ばない。

(11) 太郎が 花子に ワインを 飲んで欲しくなかった。

換言すると、(1a)の上位の中核と下位の中核は中核操作子を共有することが不可能である。この観察は(1a)が（中核操作子を共有しない）中核等位接続であることを示している。⁵

4. 願望構文のリンキングと格付与

本節で扱うリンキングは述語の語義分解表示からマクロロールに至る局面のみである。まず、Koenig and Davis (2001)に従って、動詞の意味を①事象の参与者の関係を範疇化した「状況の中核 (situational core)」と②参与者の関係が生じる世界を限定する「下位語彙的モダリティ (sublexical modality)」に分け、後者はリンキングに関わらないと想定する。

ここで、「ほしい」は①「XがYに働きかけ、Yが参加する事象Zを実現する／XがYを参与者として関与する事象Zを実現する」状況的核心、②「希望 (bouletic)」(Xの願望が充足される)という非事實的 (irrealis) 操作子の下位タイプを含む下位語彙的モダリティ、から構成される述語であると考ええる。(12a,b)は、(1a,b)の語義分解及び述語の意味の中核的部分に相当する語義分解が成り立つ範囲を限定するモダリティ操作子である。⁶

(12) a. Situational Core of (1a)

[do' (T, [act-on' (T, H)])] CAUSE [BECOME exist' ([do' (H, [drink' (H, wine)])]]]

Modal Modification

Operator: Bouletic (a subtype of **energetic Modal**)

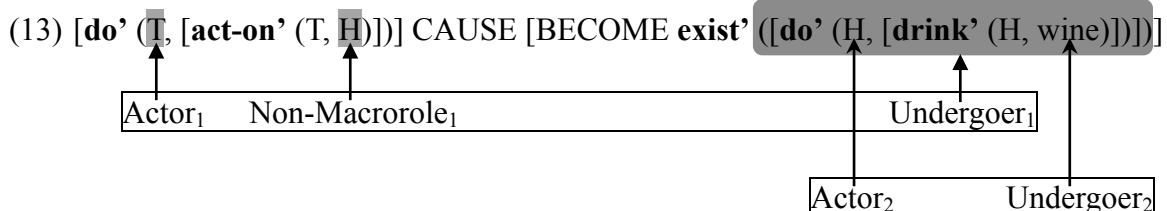
b. Situational Core of (1b)

[do' (T, ∅)] CAUSE [BECOME exist' ([do' (H, [drink' (H, wine)])]]]

Modal Modification

Operator: Bouletic (a subtype of **energetic Modal**)

(12a)の語義分解の項に対してマクロロール (Van Valin and LaPolla 1997) は(13)のように付与される（一般的意味役割のマクロロールには行為者 (actor) と受動者 (undergoer) があるが、両者は他動詞文の主要項に相当し、どちらも自動詞文の主語として機能する）。

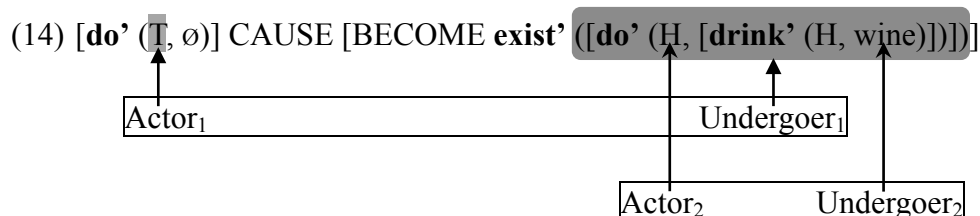


⁵ 補助動詞「もらう」を伴う授受構文（例：太郎が母に本を読んでもらっている）は「もらう」と補部動詞が共に内核操作子のテイル形式の作用域に入る。このため、本稿の分析対象である（中核接続の）願望構文とは異なり、内核連位接続 (nuclear cosubordination) を体現する複合述語 (complex predicate) 構文である (Matsumoto (1996: Ch.3)は両構文を同列に扱っている)。この接続構造の相違から、「もらう」を伴う授受構文の補部の意味上の主語が主格標示を受けないことが導かれる。

⁶ ある事象 X を望むことは、適切と思われる状況下で X をひき起こすべく行動する性向／意向を持つことであると考ええる (Copley and Wolff 2015)。

「ほしい」と「飲む」は、標準的な意味役割階層である「行為者・受動者階層 (Actor-Undergoer Hierarchy)」に従って、マクロロールを自らの項に与える。まず、太郎は「ほしい」の行為者 (Actor₁) に、太郎が望む事象を示す項 (ハイライト部分) は受動者 (Undergoer₁) に、花子は (行為者でも受動者でもない) 非マクロロールになる。また、補部動詞「飲む」の項である花子とワインは、それぞれ行為者 (Actor₂)、受動者 (Undergoer₂) となる。

一方、(1b)の語義分解である(12b)には、マクロロールは(14)のように付与される。



太郎は行為者 (Actor₁) となり、太郎が望む事象を表す項は受動者 (Undergoer₁) となる。同様に、「飲む」の項である花子とワインは行為者 (Actor₂)、受動者 (Undergoer₂) となる。

(13), (14)のマクロロール付与を踏まえて、格付与制約(15a)-(15c)をランク付けした(16a)の制約階層及び(16b)の最小格付与領域の規定から、(1a,b)の格交替を導くことができる。⁷

(15) 格付与制約 (Nakamura 1999; cf. Van Valin and LaPolla 1997) ⁸

- a. ある項が主格標示を受ける。
- b. 非マクロロール項は与格標示を受ける。
- c. 受動者項は対格標示を受ける。

(16) 日本語の格システム

- a. 日本語の制約階層：(15a) >> (15b) >> (15c)
- b. 最小格付与領域：中核 (core)

(16b)の独立した根拠としては、時制辞を含まない「ながら」構文 (例：実力がありながら、太郎は不合格になった) や時間接辞 (temporal affix) 構文 (例：太郎が車を運転中、息子が助手席で気を失った) (Horiuchi 2004) に主格標示の名詞が生じることが挙げられる。

まず、(16)の制約ランキングを(1a)の2つの中核に適用すると、上位の中核の行為者項である太郎は主格標示、非マクロロール項の花子は与格標示を受ける。さらに、補部として機能する中核の行為者項である花子は主格標示、受動者項のワインは対格標示を受ける。⁹ 同様に、(16a)を(1b)の2つの中核に適用すると、上位の中核の行為者の太郎は主格標示を

⁷ Van Valin and LaPolla (1997: 577-581)は格付与領域が中核である言語 (例：アイスランド語) と節である言語 (例：英語、エンガ語、ネワリ語) を区別するが、こうした二分法は不要である。

⁸ Van Valin and LaPolla (1997)が提案する格付与規則は、非マクロロール項でも、受動文の唯一項であれば、主格標示を受ける (例：「太郎が次郎にぶつかった」⇔「次郎がぶつかられた」) 日本語の格システムを記述することができないため、本稿では採用しない (Nakamura 1999)。

⁹ (1a)の補部の中核の行為者 (花子) が主格標示を受けることは確認できないが、間接的な根拠はある。使役動詞 *ha-ta* を伴う朝鮮語の統語的使役構文は、被使役者が与格標示の場合、本稿の分析対象の願望構文と同様、中核等位接続である (Song 1996: 119-128)。朝鮮語には、修飾する名詞と同じ格標示 (主格/対格のみ) を受ける遊離数量詞があるが、中核等位接続を体現する使役構文の与格標示の被使役者を修飾する遊離数量詞は主格標示を受ける (O'Grady 1991: 222)。

Nay-ka	haksayng-eykey	[seys-i]	ttena-key	hay-ss-ta.
I-NOM	student-DAT	three-NOM	leave-CMPL	do-PAST-DEC

“I had three students leave.”

この数量詞の主格標示を説明するためには、補部の中核の意味上の主語が (統語的には実現されていなくても) (16a)から主格標示を取ると考える他ない。上の例文と同様に中核等位接続を体現する日本語の願望構文(1a)の補部の主語項も (不可視であっても) 主格標示を受けると考えられる。

受け、補部として機能する中核の2つの項（「花子」＝行為者、「ワイン」＝受動者）は、(1a)と同様に、それぞれ主格標示、対格標示を受ける。

5. 結論

本稿は、理論的枠組として RRG（特に接続構造とリンキングの理論）を採用し、(1a,b)が例証する願望構文が、異なる接続構造（(1a)が中核等位接続、(1b)が中核従位接続）を体現していること、(1a,b)の格交替は、RRG のリンキング理論及び本稿と独立に Nakamura (1999) で提案された(16a,b)の制約階層と格付与領域の規定から導き出されることを示した。

本稿の独自の貢献は、①「ほしい」の意味の中核的部分と下位語彙的モダリティを区別したことにより、(1a)の願望を受ける人の与格標示を複他動詞文の受領者項の与格標示もカバーする制約(15b)から導いたこと、②RRG の接続構造の理論と(16a,b)に基づき、(1b)の補部の主語の主格標示を制約(15a)から一元的に導いたこと、である。この2点は時制辞と主格付与を結びつける先行研究（例：竹沢 1998）では未達成に終わった点であり、格付与制約が言及するマクロロール及び接続構造の類型論の一定の有用性を示すものである。

参考文献

- Bybee, Joan. 1985. Morphology: A Study of the Relation Between Meaning and Form. Amsterdam: John Benjamins.
- Carnie, Andrew. 2008. Constituent Structure. Oxford: Oxford University Press.
- Copley, Bridget and Philip Wolff. 2015. "Theories of causation should inform linguistic theory and vice versa," in Bridget Copley and Fabienne Martin (eds.), Causation in Grammatical Structures, 11-57. Oxford: Oxford University Press.
- Horiuchi, Hitoshi. 2004. "Lexical integrity, head sharing, and case marking in Japanese temporal affix constructions," Proceedings of the LFG04 Conference: 247-267.
- Jackendoff, Ray. 1997. The Architecture of the Language Faculty. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Koenig, Jean-Pierre and Anthony Davis. 2001. "Sublexical modality and the structure of lexical semantic representations," Linguistics and Philosophy 24(1): 71-124
- Lambrecht, Knud. 1994. Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud. 2000. "When subjects behave like objects: an analysis of the merging of S and O in sentence-focus constructions across languages," Studies in Language 24(3): 611-682.
- Matsumoto, Yo. 1996. Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Nakamura, Wataru. 1999. "An Optimality-theoretic account of the Japanese case system," Studies in Language 23(3): 597-649.
- 中村渉. 2015. 「文の統語構造と意味構造」中村渉・佐々木冠・野瀬昌彦著『認知類型論』13-110. 東京：くろしお出版.
- O'Grady, William. 1991. Categories and Case. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Sells, Peter. 1990. "VP in Japanese: evidence from *-te* complements," in Hajime Hoji (ed.), Japanese/Korean Linguistics, Vol.1, 319-333. Stanford, CA: CSLI Publications.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』東京：大修館書店.
- Song, Jae Jung. 1996. Causatives and Causation: A Universal-Typological Perspective. London and New York: Longman.
- 竹沢幸一. 1998. 「格の役割と構造」竹沢幸一・John Whitman 著『格と語順と統語構造』1-102. 東京：研究社出版.
- Van Valin, Robert D., Jr. 2005. Exploring the Syntax-Semantics Interface. Cambridge: Cambridge University Press.
- Van Valin, Robert D., Jr. and Randy J. LaPolla. 1997. Syntax: Structure, Meaning and Function. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.